慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに
Sub Title	
Author	古石, 篤子(Koishi, Atsuko)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2014
Jtitle	リサーチメモ : 「ことばの教育の、あした」を考える : 多言語活動のすすめ ,p.3- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	古石篤子(編•著)
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO92001002-2014-002-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

慶應義塾大学SFC（湘南藤沢キャンパス）が毎年秋に六本木で開催しているORF（Open Research Forum）は、大学における教育・研究と社会との接点を創るうえで大変貴重な機会を提供してくれている。古石篤子研究会（ゼミ）は、2011 年には「バイリンガル・バイカルチュラルろう教育： 映像を通して見る　カナダにおける革新的試み」というタイトルで、言語的少数者であるろう児の教育に関するパネルディスカッションを企画したが、70 人ほど収容できる会場で立ち見がでるほどの盛況ぶりであった。六本木という華やかな場所で、ろう教育という比較的地味な分野の発表にこれほど多くの方々がお集りくださるとは、正直言って思ってもいなかった。そのとき、大学での教育・研究をアカデミズムのなかに閉じ込めずに、もっと社会に開いたものとしなければいけないと感じた。そう思ったとき、このORFの威力を改めて見直したのである。社会に向けて発信する場所がここにある！

そこで、翌年と翌々年、つまり2012年と2013年のいずれも11月23日（祝）に、いまの日本の外国語教育、とりわけ小学校における「外国語活動」やことばの教育一般に対して危機意識をもっている「仲間たち」と「『ことばの教育の、明日』を考える － 多言語活動のすすめ －」というタイトルのパネルディスカッションを企画した。2013年の方は「第2弾！」と銘打った。このちょっとふしぎなタイトルは、パネルディスカッションと並行して学生諸君によって企画・実践されたブース（スタンド）のタイトルが、2012 年は「『ことばの教育の、明日』を考える」だったので、それと連動させたのである。ブースの方の2013年のタイトルは「模擬授業、ことばの教育工房」であった。本報告書は2013年のパネルディスカッションでの発表を中心とし、それに2012年の発表から、つつじが丘小学校での実践報告を加えたものとした。このつつじが丘小学校での試みは英語やフランス語では書かれたものが存在するが、日本語では本邦初公開となり、新しい情報も追加した。

さて、上に「危機意識」と書いたが、2013 年 11 月には、前年に比べてそれはかなり強まっていたといえる。なぜなら、この1年の間に状況は速いスピートで、より深刻になったように思われるからである。つまり、日本の外国語教育において「英語狂想曲」がよりかまびすしく鳴り響くようになったのである。たとえば、2013年4月8日の自民党教育再生実行本部「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言」や、同年5月28日の政府教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）」（いずれも安倍首相に提出）では、大学受験資格や卒業要件としてTOEFL等の外部試験の活用や、小学校での英語学習の抜本的拡充等が提言されるに至った。その間、5月末には経済同友会が大学入試にTOEFLなどを活用することを提言した。そして、2013年のORFのちょうど1ヶ月前、10月23日の読売新聞ではトップページに「英語授業 小3から」という大見出しの下、2020年度をめどに小学校5・6年生で英語を正式教科化するという文科省方針がスクープ報道された。その内容はORFも終った2013年12月13日になって文部科学省から、「グローバル化に

対応した英語教育改革実施計画」として、「小・中・高の各段階を通じて英語教育を充実し、生徒の英語力を向上させる」というよりいっそう強化された形で提案されるに至った。付言すれば、この「実施計画」は武道の必修化や道徳の教科化などを含む「日本人のアイデンティティに関する教育の充実」と抱き合わせである。

いったいこのような「実用的な英語、英語、英語、英語、英語……」というだけの教育方針で、21 世紀にはばたく子どもたちの興味を掬いとれるのだろうか、彼らの未来をほんとうに責任をもって準備してあげることができるのだろうかという危惧が募る。彼らを日本語と英語の「二重の単一言語主義」(Perregaux, 2007) に閉じ込めてしまってはいけないのである。世界はもっと広い。経済的な観点から必要とされる「グローバル人材」でさえこれでいいとは思えない。このようなうすっぺらな教育を受けて巣立った人間が、これからの異言語・異文化がぶつかり合う国内外において、はたして自由に活躍してゆけるのか大きな疑問をいだかざるをえないからである。

以上のような思いを持ち、いまの日本の状況に対抗しうる考え方や具体的な方法を共に模索するために、パネルディスカッション「『ことばの教育の、明日』を考える － 多言語活動のすすめ －」を企画した。私たちは子どもたちが触れることばのパレットには、たくさんの色があってほしいと願っている。もちろん自分のことばも大事にしてほしいし、それを見る目も養ってほしい。ことばを通したさまざまな活動を通じて、考える力を育て、異なるものとの出会いにもおそれない人間になってほしいと願ってもいる。それにはどうしたらいいのだろうか。

1 章の大津由起雄さんは「文科省の方向性についての分析と裏話など」というタイトルで、小学校英語の歴史から始まり、現行学習指導要領策定の裏話について語ってくださる。2 章の吉村雅仁さんは「多言語活動実践に向けて － 教員研修と『グローバル人材』育成 －」で、多言語活動を実践していくうえでの教員研修の問題と「グローバル人材」再考がテーマである。そのあとの 3 つの論考は、実際の小学校における多言語活動の実践報告であるが、秦さやかさんは 6 年間を通した実践の可能性を考察し、その上でアイヌ語や漢字を使った活動をご報告くださり、渡辺香代子さんは実際に行ったオノマトペを使った多言語活動を、より大きなことばの教育の枠組みのなかに位置づけて提示して見せてくれる。3 つ目の報告は、1 つの授業のなかに多言語が存在する形の多言語活動ではなく、4 つの言語に少しずつ順番に触れてゆくタイプの多言語活動の紹介である。

2014 年 3 月
古石　篤子